森鷗外『うたかたの記』のテクスト生成研究(資料篇)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 檀原, みすず メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4713

森鷗外『うたかたの記』のテクスト生成研究（資料篇）

檀原　みすず

『うたかたの記』は、鷗外のドイツ留学記念三部作の『舞姫』『うたかたの記』『文づかひ』のうち、二番目に発表された作品である。『舞姫』と『文づかひ』については鷗外の自筆原稿が残されており、それらの原稿が複製刊行されているが『うたかたの記』に関しては自筆原稿の有無が不明である。『うたかたの記』が最初に活字で発表されたのは明治二三年八月二五日発行の「しがらみ草紙」第十一号であった。

この作品は他の二作と同様に作者が機会あるごとに改稿を行っているので五種類の異なった本文が存在する。初出の「しがらみ草紙」・『美奈和集』・『改訂水沫集』・『塵泥』・『縮刷美奈和集』などの諸本を比べると、それぞれの本文間での異同が多く認められる。その種類は、文・句・用語・助動詞・助詞・送り仮名・漢字・平がな・外国語表記などの変更や、誤植の訂正などと多岐にわたっている。こうした鷗外の推敲過程をたどることによって、作者の改訂の意図を探り、そこから新たな読みの可能性も生まれてこよう。

『うたかたの記』はドイツの芸術都市ミュンヘンを舞台に、日本人画家巨勢がマリイをモデルとして「ローレライの図」を完成させるまでを描いた芸術家小説である。この作品の主人公巨勢のモデルが滞独中の鷗外と親交のあった洋画家原田直次郎であることは作者自身が明らかにしている。帰国後、鷗外は第三回内国勧業博覧会に原田直次郎が出品した「騎龍観音」図をめぐり、外山正一との間で「日本絵画の未来」論争を展開した。鷗外の「外山正一氏の画論を駁す」（「柵草紙」第八号、明治23・5）は原田の絵を擁護する立場で外山の画題論に反対するものであった。『うたかたの記』は、この論争を契機に鷗外の美術観にもとづいて書かれた作品であると考えられる。

「改訂水沫集序」（明治39・5）で、原田直次郎から多くの資料を提供されたと云われる『うたかたの記』は、『美奈和集』の巻頭に据えられており、原田との友情の記念碑的作品と言えよう。

なお、『うたかたの記』が『舞姫』より先に執筆されたとする説が森潤三郎や与謝野寛らにあるが、この作品が外山正一と森鷗外との美術論争を契機に書かれたという点が認められるので『うたかた

の記』第一作説は成立しなくなると考えられる。またこの問題は『うたかたの記』初出文と『舞姫』原稿文との厳密なテクスト分析やテクスト生成過程の調査などを通して考察する必要があろう。

『うたかたの記』の作品を読む上でこのテクスト生成過程の研究は、文学研究と不可分の関係にあると言えるだろう。

本稿では『うたかたの記』の初出文が掲載された「しがらみ草紙」を底本として、出来る限り詳細に鷗外の改訂の跡をたどり、四種類の本文についてそれぞれの異同を示すことにしたい。

凡例

一、『うたかたの記』の校異は、鷗外自身が加筆訂正したと認められる次の五種類の本文を取り上げる。［　］内は諸本の略称である。

［底］「しがらみ草紙」第十　号　明治二三年八月二五日
［美］『美奈和集』（初版）　明治二五年七月一日　春陽堂
［改］『改訂水沫集』（訂正再版）　明治三九年五月二十日　春陽堂
［塵］『塵泥』（初版）　大正四年一二月二三日　千章館
［縮］『縮刷美奈和集』（初版）　大正五年八月一三日　春陽堂

一、「しがらみ草紙」を底本とし、［底］と表記する。

一、本文の旧漢字・旧仮名などは出来る限り「しがらみ草紙」と同じ字体を尊重し、ルビも「しがらみ草紙」と同じように付した。

一、［底］には文頭の一字下げがないため段落がはっきりしていないので、諸本を校合した上で全文を五四節に分けた。

一、各節のはじめに付けた〈　〉の算用数字は段落番号を、各行末の○の数字は行番号を表す。

一、**【　】**は［底］の引用箇所であり、その下に諸本との間の変更部分を**ゴシック**で示した。

一、漢字の俗字や異体字などへの変更は全て挙げている。

一、変体仮名や踊り字の変更も全て挙げている。ただし合字は取り上げなかった。

一、ルビは［底］では適宜に振られているが、［美］以降の本文ではほとんど省かれている。ルビの異同はいちいち取り上げないが必要な場合のみ示した。

一、句読点の変更はできる限り示した。

一、カタカナの固有名詞の傍線（人名）、二重傍線（地名）の変更は挙げている。

一、＊（アステリスク）は注記を示す。

うたかたの記

上

〈1〉幾頭の獅子の挽ける車の上に、勢よく突立ちたる、女神「バワリヤ」の像は、先王ルウド井ヒ第一世が此凱旋門に据ゑさせしなりといふ。その下よりルウド井ヒ町を左に折れたる處に、トリエント産の大理石にて築きおこしたるおほいへあり。これバワリヤの首府に名高き見もの なる美術學校なり。校長ピロッチイが名は、をちこちに鳴りひゞきて、獨逸の國々はいふもさらなり、新希臘、伊太利、瑯馬などよりも、こゝに來りつどへる彫工、畫工數を知らず。日課を畢へて後は、學校の向ひなる、「カツフエエ、ミ子ルワ」といふ店に入りて、咖啡のみ、酒くみかはしなどして、おもひ〳〵の戯す。こよひも瓦斯燈の光、半ば開きたる窓に映じて、内には笑ひさゞめく聲聞ゆるをり、かどにきかゝりたる二人あり。

①【「バワリヤ」】バワリヤ［美・改］バワリア［塵］バワリア［縮］。②【ルウド井ヒ町を】ルウド井ヒ第一世【ルウド井ヒ第一世】ルウド井ヒ第一世［塵］。③【バワリヤの】バワリアの［塵］バワリアの［縮］。④【いふもさらなり】いふまもさらなり［塵］。⑥【ミ子ルワ】ミネルワ［塵・縮］。【咖啡】珈琲［塵］。ルウド井ヒ町を［美・改］ルウド井ヒ町を［塵］ルウド井ヒ町を［縮］。

〈2〉先に立ちたるは、かち色の髪のそゝけたるを厭はず、幅廣き襟飾斜に結びたるさま、誰が目にも、ところの美術諸生と見ゆなるべし。立ちとまりて、後なる色黑き小男に向ひ、「こゝなり」といひて、戸口をあけぬ。

②【見ゆなるべし。】見ゆ**る**なるべし。［美・改・塵・縮］。【立ちと　り】ここなり［縮］。③【戸口をあけぬ】戸口をあけ**つ**［美・改・塵・まりて、】立ち**住**りて、［美・改・塵］立ち**止**りて、［縮］。【こゝな　縮］。

〈3〉先づ二人が面を撲つはたばこの烟にて、遽に入りたる目には、中なる人をも見わきがたし。①日は暮れたれど暑き頃なるに、窓悉くあけ放ちはせで、かゝる烟の中に居るも、習となりた②るなるべし。「エキステルならずや、いつの間にか歸りし。」「なほ死なでありつるよ。」③など口々に呼ぶを聞りば、彼諸生はこの群にて、馴染あるものならむ。その間、あたりなる④客は珍らしげに、後につきて入來れる男を見つめたり。見つめらるゝ人は、座客のなめなる⑤を厭ひてか、暫し眉根に皺寄せたりしが、とばかり思ひかへしゝにや、僅かに笑を帶びて、一⑥座を見度しぬ。⑦

①【見わきがたし】見わ**け**がたし［縮］。③＊［縮］では「エキステル」ずや［縮］。⑤【見つめたり】見つめ**居**たり［縮］。⑦【見度しぬ】見の前で改行されている。［美・改］では前の「なるべし。」が行末に位**渡**しぬ［縮］。置するため改行の有無は不明。【エキステルならずや】エ**ク**ステルなら

〈4〉この人は今着きし瀉車にて、ドレスデンより來にければ、茶店のさまの、かしことこゝと殊①なるに目を注ぎぬ。人理石の圓卓幾脚かあるに、白布掛けたるは、夕餉畢りたる迹をまだか②たづけざるならむ。裸なる卓に倚れる客の前に据ゑたる土やきの盃あり。盃は圓筒形にて、③燗徳利四つ五つも併せたる大さなるに、弓なりのとつ手つけて、金蓋を蝶番に作りて覆ひた④り。客なき卓に咖啡碗置いたるを見れば、みな倒に伏せて、絲敷の上に砂糖、幾塊か盛れる⑤

小皿載せたるもをかし。　⑥

①【ドレスデンより】ドレスデンより［改・塵］ドレスデンより［縮］。【殊なるに】異なるに［縮］。②【幾脚かあるに】幾つかあるに［美・改・塵・縮］。【畢りたる迹】畢りし迹［塵］。【かたづけざる】片附けざる［塵］。④【とつ手】とり手［塵・縮］。⑤【珈琲碗】珈琲碗［塵］。【絲敷】絲底［改・塵・縮］。

〈5〉客はみなりも言葉もさま〳〵なれど、髪もけづらず、服も整へぬは一様なり。されどあながち卑しくも見えぬは、流石理想世界に遊ぶやからなればならむ。中にも際立ちて賑しきは中央なる大卓を占めたる一群なり。余所には男客のみなるに、獨こゝには少女あり。今エキステルに伴はれて來し人と目を合はせて、互に驚きたる如し。　①②③④

②【流石理想世界に遊ぶやからなればならむ。】流石藝術世界に遊べるからにやあるらむ。［塵］。③【エキステル】エクステル［縮］。

〈6〉來し人はこの群に珍らしき客なればにや。また少女の姿は、初めて逢ひし人を動かすに餘あらむ。前庇廣く飾なき帽を被ふりて、年は十七八ばかりと見ゆる顏ばせ、エヌスの古彫像を欺けり。そのふるまひには自ら氣高き處ありて、かいなでの人と覺えず。エキステルが隣の卓なる一人の肩を拍ちて、何事をか語居たるを呼びて「こなたには面白き話一つすべき人なし、此樣子にては骨牌に遁れ球突に走るなど、忌はしき事を見むも知られず。おん連れの方と共に、こなたへ來たまはずや。」と笑みつゝ勸むる、その聲の清きに、いま來し客は耳傾けぬ。　①②③④⑤⑥⑦

①【珍らしき客】珍しき客［縮］。②【帽を被ふりて】帽を被ぶりて［塵・縮］。③【エキステル】エクステル［縮］。④【呼びて「こなた」呼びて。「こなた［美・改・塵・縮］。【話一つすべき人なし、】話一つす る人なし。［美・改・塵・縮］。⑥【耳傾けぬ】耳傾けつ［美・改・塵・縮］。

〈7〉「マリイの君の居玉ふ處へ、誰か行かざらむ。人々も聞け、けふ此『ミ子ルワ』の仲間に入れむとて伴ひたるは、巨勢君とて、遠きやまとの畫工なり。」とエキステルに紹介せられて、隨來つる男の近寄りて會釋するに、起ちて名乘りなどするは、外國人のみ。さらぬは坐した る儘にて答ふれど、侮りたるにもあらず、此仲間の癖なるべし。

①【『ミ子ルワ』】『ミネルワ』［塵］。②【エキステル】エクステル［縮］。③【隨來つる男】隨來ぬる男［美・改・塵・縮］。③【名乘りなどするは】名告りなどするは［塵］。

〈8〉エキステル、「わが、ドレスデンなる親族訪ねにゆきしは人々も知りたり。巨勢君にはかしこなる畫堂にて逢ひ、それより交を結びて、こたび巨勢君、こゝなる美術學校に、しばし足を駐めむとて、旅立ち玉ふをり、われも倶にかへり路に上りぬ。」人々は巨勢に向ひて、はる〴〵來ぬる人と相識れるよろこびを陳べ、さて、「大學にはおん國人も、をり〳〵見ゆれど、美術學校に來たまふは、君がはじめなり。けふ着きたまひしとなれば、「ピナコテエク」、また美術會の畫堂なども、まだ見玉はじ。されど余所にて見たまひし處にて、南獨逸の畫を何とか見たまふ。」「こたび來たまひし君が目的は奈何。」など口々に問ふ。マリイはおしとゞめて、「しばし〳〵、かく口を揃へて問はるゝ、巨勢君とやらむの迷惑、人々おもはず

や。聞かむとならば、靜まりてこそ。」といふを、「さても女土人の嚴しさよ。」と人々笑ふ。巨勢は調子こそ異様なれ、拙からぬ獨逸語もて語りいでぬ。 ⑨ ⑩

①【エキステル】エクステル［縮］。【わが、ドレスデン】わがドレスデン［美・改・塵・縮］。③【はるゞ〳〵來ぬる】はる〳〵來ぬる［塵］はるばる來ぬる［縮］。⑤【「ピナコテエク」】『ピナコテエク』［美・改・塵・縮］。⑥【余所にて】餘所にて［縮］。⑦【見たまふ。」「こたび】見たまふ。こたび［美・改・塵・縮］。【おしとゞめて、「しばし】おしとゞめて。「しばし［美・改・塵・縮］。⑨【嚴しさよ。」】嚴しさよ、」［美・改・塵・縮］。

〈9〉

「わがミユンヘンに來しは、このたびを始とせず。六年前にこゝを過ぎて、索遜にゆきぬ。そのをりは「ピナコテエク」に懸けたる畫を見しのみにて、學校の人々などに、交を結ぶを得ざりき。そは故郷を出でし時よりの目あてなるドレスデンの畫堂へ往かむと、心のみ急がれしゆゑなり。されど再びこゝに來て、君等がまとゐに入るをゝなりし、その因縁をは、早く當時に結びぬ。」 ① ② ③ ④ ⑤

④【入るとゝなりし】入るととなりし［美・改・塵］入ることとなりし［縮］。【その】其［塵］。【因縁をは】因縁をば［塵・縮］。

〈10〉

「大人氣なしといひけたで聞き玉へ。謝肉の祭、はつる日の事なりき。「ピナコテエク」の館出でし時は、雪いま晴れて、街の中道なる並木の枝は、一つゞ〳〵薄き氷にてつゝまれたるが、今點ぜし街燈に映じたり。いろ〳〵の風したる衣を着て、白くまた黑き百眼掛けたる人、群をなして往來し、こゝかしこなる窓には毛氈垂れて、物見としたり。カルヽの辻なる ① ② ③ ④

『カツフエエ、オリヤン』に入りて見れば、おもひ〳〵の假装色を爭ひ、中に雜りし常の衣もはえある心地す。みなこれ『コロツセウム』、『井クトリヤ』などいふ舞踏場のあくを待ちたるなるべし。」

⑤ ⑥ ⑦

①＊[底]では「謝肉」に「しゃにく」、「謝肉の祭」に「カル子ワル」と両側にルビがふられているが、[塵]では「謝肉」に「カルネワル」と右にルビが付いている。【「ピナコテエク」】『ピナコテエク』[美・改・塵・縮]。②【一つ〳〵】一つ〳〵[縮]。③【いろ〳〵の風したる衣】いろ〳〵の異様なる衣[塵]。【白くまた黑き】白く又黑き[塵]。④【『カツフエエ、オリヤン』】『カツフエエ、ロリヤン』[改]『カツフエエ、ロリアン』[塵・縮]。⑤【雜りし常の】雜れる常の[縮]。⑥【『井クトリヤ』】『井クトリア』[塵]『井クトリア』[縮]。【待ちたるなるべし。】待てるなるべし。[塵]。

〈11〉

かく語る處へ、胸あてにつゞけたる白前垂掛けし下女、麥酒の泡だてるを、ゆり越すばかり盛りたる、例の大杯を、四つ五つづゝ、とつ手を寄せてもろ手に握りもち、「新しき樽よりとおもひて、遲うなりぬ。許したまへ。」とことわりて、前なる杯飲みほしたりし人々にわたすを、少女、「こゝへ、こゝへ。」と呼びちかづけて、まだ杯持たぬ巨勢が前へも置かす。巨勢は一口飲みて語りつぎぬ。

① ② ③ ④ ⑤

①【胸あてに】胸當に[塵]。【掛けし】掛けたる[塵]。②【盛りたる、例の】盛りたる例の[美・改・塵・縮]。【とつ手を】とり手を[塵・縮]。③【許したまへ。】許したまへ」[美・改・塵・縮]。④【こゝへ。」と】こゝへ」と[美・改・塵・縮]。【前へも】前にも[美・改・塵・縮]。⑤語りつぎぬ】語りつゞけぬ[塵]。

〈12〉

「われも片隅なる一榻に腰掛けて、賑はしきさま打見るほどに、門の戸あけて入りしは、きたなげなる十五ばかりの伊太利栗うりにて、燒栗盛りたる紙筒を、堆く積みし箱かいこみ、『マロオニイ、セニヨレ。』（栗めせ、君）と呼ぶ聲も勇ましき、後につきて入りしは、十二三と見ゆる女の子なりき。舊びたる鷹匠頭巾、ふか〳〵と被り、凍えて赤うなりし兩手さしのべて、淺き目籠の緣を持ちたり。目籠には、常磐木の葉、敷きかさねて、その上に時ならぬ菫花の束を、愛らしく結びたるを載せたり。『ファイルヘン、ゲフェルリヒ』（すみれめせ）と、うなだれたる首を擡げもあへでいひし聲の清さ、今に忘れず。この童と女の子と、道連れとは見えねば、童の入るを待ちて、これをしほに、女の子は來しならむとおもはれぬ。」

①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧

④【女の子なりき】女なりき［縮］。⑤【敷きかさねて】敷き重ねて［塵］。　は誤植。【おもはれぬ】思はれぬ［縮］。

⑧【道連れとは】道連とは［縮］。【待ちて】持ちて［塵］。＊［塵］

〈13〉

「この二人のさまの殊なれるは、早くわが目を射ぬ。人を人ともおもはぬ、殆憎げなる栗うり、やさしくいとほしげなるすみれうり、いづれも群居る人の間を分けて、座敷の眞中、帳場の前あたりまで來し頃、そこに休み居たる大學々生らしき男の連れたる、英吉利種の大狗、いまゝで腹這ひて居たりしが、身を起して、脊をくぼめ、四足を伸ばし、栗箱に鼻さし入れぬ。それと見て、童の拂ひのけむとするに、驚きたる狗、あとに跟きて來し女の子に突當れば、『あなや。』とおびえて、手に持ちし目籠とり落したり。莖に錫紙巻きたる、美しきすみれの花束、きら〳〵と光りて、よもに散りぼふを、好き物得つと彼狗、踏みにぢりては、唧へて引きちぎりなどす。ゆかは煖爐の温まりにて解けたる、靴の雪にぬれたれば、あたり

①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧

の人々、かれ笑ひ、これ罵るひまに、落化狼藉、なごりなく泥土に委ねたり。栗うりの童は、⑨逸足出して逃去り、學生らしき男は、欠しながら狗を叱し、女の子は呆れて打守りたり。こ⑩の菫花うりの忍びて泣かぬは、うきになれて涙の泉涸れたりしか、さらずは驚き惑ひて、一⑪日の生計、これがために止まむとまでは想到らざりしか。しばしありて、女の子は砕けのこ⑫りたる花束二つ三つ、力なげに拾はむとするとき、帳場の女の知らせに、こゝの主人出でぬ。⑬赤がほにて、腹突きいだしたる男の、白き前垂したるなり。太き拳を腰にあてゝ、花賣りの⑭子を暫し睨み、『わが店にては、暖簾師めいたるあきなひ、せさせぬが定なり。疾くゆきね』。⑮とわめきぬ。女の子は唯、言葉なく出てゆくを、滿堂の百眼、一點の涙なく見送りぬ」。⑯

①【殊なれるは】殊なるは［美・改・塵・縮］。【目を射ぬ】目を射き［美・改・塵・縮］。【殆憎げなる】殆ど憎げなる［縮］。④【脊をくぼめ】脊をくぼめ［美］背をくぼめ［塵・縮］。＊［美］は誤植。【さし入れぬ】さし入れつ［美・改・塵・縮］。⑤【あとに跟きて】あとに跟きて［美・改・縮］あとに附きて［塵］。⑥【『あなや。』と】『あなや、』と［美・改・塵］『あなや』と［縮］。⑦【踏みにぢりては】踏みにじりては［美・改・塵・縮］。⑧【喞へて】嗔へて［改・塵］銜へて［縮］。⑩【欠しながら】欠びしつゝ［塵］。⑪【さらずは】さらずば［縮］。⑫【止まむと】已まむと［塵］。⑬【帳場の女の】帳場にゐる女の［塵］。⑮【睨み、『わが】睨み。『わが［美・改・塵・縮］。【疾くゆきね』。】疾くゆきね。』［縮］。⑯【唯、言葉なく】唯言葉なく［美・改・塵・縮］。【出てゆくを】出でゆくを［塵・縮］。【一點の涙】一滴の涙［塵］。【見送りぬ。】見送りぬ。］［縮］。

〈14〉「われは咖啡代の白銅貨を、帳場の石板の上に擲げ、外套取つて馳出て見しに、花賣の子は、①ひとりしく〳〵と泣きてゆくを、後より呼べど顧みず。追付きて『いかに、善き子、菫花の②しろ取らせむ』といふを聞きて、始めて仰見ぬ。そのおもての美しさ、濃き藍いろの目には、③そこひ知らぬ憂ありて、一たび顧みるときは人の腸を斷たむとす。嚢中の『マルク』七つ八④

つありしを、から籠の木の葉の上に置きて與へ、驚きて何ともいはぬひまに、立去りしが、⑤
その面、その目、いつまでも目に付きて消えず。ドレスデンにゆきて、畫堂の額うつすべき⑥
許しを得て、『ヱヌス』、『レダ』、『マドンナ』、『ヘレナ』、いづれの圖に向ひても、⑦
不思議や、すみれ賣のかほばせ霧の如く、われと畫額との間に立ちて碍礙をなしぬ。かくて⑧
は所詮、我業の進まむと覺束なしと、旅店の二階に籠もりて、長椅子の覆革に穴あけむとせ⑨
し頃もありしが、一朝大勇猛心を奮ひおこして、わがあらむ限の力をこめて、此花賣の娘の⑩
姿を無窮に傳へむとおもひたちぬ。さりけれどわが見し花うりの目、春潮を眺むる喜の色あ⑪
るにあらず、暮雲を送る夢見心あるにあらず、伊太利古跡の間に立たせて、あたりに一群の⑫
白鳩飛ばせむと、ふさはしからず。我空想はかの少女をラインの岸の巖根に居らせて、手に⑬
一張の琴を把らせ、嗚咽の聲を出させむとおもひ定めにき。下なる流にはわれ一葉の舟を泛⑭
べて、かなたへむきてもろ手高く擧げ、面にかぎりなき愛を見せたり。舟のめぐりには數知⑮
られぬ、『ニックセン』、『ニユムフエン』などの形波間より出でゝ揶揄す。けふ此ミユン⑯
ヘンの府に來て、しばし美術學校の『アテリエ』借らむとするも、行李の中、唯此一畫藁、⑰
これをおん身等師友の間に議りて、成しはてむと願ふのみ。」⑱

①【咖啡代】珈琲代［塵］。【取つて馳出て見しに】取りて出でゝ見しに［塵］。②【しく〳〵と】さめ〳〵と［塵］。【後より呼べど顧みず】呼べども顧みず［美・改・塵・縮］。【追付きて『いかに】追付きて、『いかに［美・改・塵・縮］。③【取らせむ』と】取らせむ、』と［美・改・塵・縮］。③【仰見ぬ】仰見つ［美・改・塵・縮］。④【そこひ知らぬ】そこひ如らぬ［塵］。＊［塵］は誤植。⑦【許しを】許を［美・改・塵・縮］。【『ヱヌス』、『レダ』、『マドンナ』、『ヘレナ』、】ヱヌス、レダ、マドンナ、ヘレナ、［美・改・塵］ヱヌス、レダ、マドンナ、ヘレナ、［縮］。⑧【碍礙をなしぬ。】碍礙をなしつ。［美・改］障礙をなしつ。［塵・縮］。⑪【おもひたちぬ】思ひたちぬ［塵］。【さ

りけれど】さはあれど［塵］。【色あるに】色にあるに［塵］。⑯【揶揄す。】揶揄す、［縮］。【けふ此】けふ此の［塵］。⑰【『アテリエ』】『アトリエ』［改・塵・縮］。

〈15〉巨勢はわれ知らず話しいりて、かくいひ畢りし時は、モンゴリヤ形の狹き目も光るばかりなりき。「いしくも語りけるかな」、と呼ぶもの二人三人。エキステルは冷淡に笑ひて聞居たりしが、「汝たちもその圖見にゆけ、一週が程には巨勢君の『アテリエ』とゝのふべきに」。といへり。マリイは物語の半より、色をたがへて、目は巨勢が唇にのみ注ぎたりしが、手に持ちし杯さへ一たびは震へたるやうなりき。巨勢は初此まとゐに入りし時、已に少女の我すみれうりに似たるに驚きしが、話に聞きほれて、こなたを見つめたるまなざし、あやまたず是れなりと思はれぬ。こも例の空想のしはざなりや否や。物語畢りしとき、少女は暫し巨勢を見やりて、「君はその後、再び花うりを見たまはざりしか。」と問ひぬ。巨勢は直ちに答ふべき言葉を得ざるやうなりしが、「否。花賣を見し其夕の瀛車にてドレスデンに立ちぬ。されどなめなる言葉を咎め玉はずはきこえ侍らむ。我すみれうりの子にも、わが『ロオレライ』の畫にも、をり〳〵たがはず見えたまふはおん身なり。」

①【モンゴリヤ】モンゴリア［塵］モンゴリア［縮］。②【語りけるかな、と】語りけるかな」と［塵］語りけるよ、」と［縮］。【エキステル】エクステル［縮］。③【その圖】其下畫［縮］。【『アテリエ』】『アトリエ』［改・塵・縮］。【とゝのふべきに」。といへり。】とゝのふべきに」といひき。［美・改・塵・縮］。④【半より、色を】半より色を［美・改・塵・縮］。⑤【一たびは震へたる】一たびは震ひたる［美・改・塵］一たび震ひたる［縮］。⑦【しはざなりや】しわざなりや［美・改・塵・縮］。⑦＊［縮］では「物語畢りしとき」の前で改行されている。［美・改］では「なりや否や。」が行末に位置するため改行の有無は不詳。⑧【見たまはざりしか。】見たまはざりしか、」

［美・改・塵・縮］。⑨【やうなりしが、】やうなりしが。［美・改・塵・縮］。【ドレスデンに】ドレスデンを［塵］。＊［塵］は誤植か。⑩【咎め玉はずは】咎め玉はずば［美・改・塵・縮］。【子にも、わが】子にもわが［美・改・塵・縮］。⑪【おん身なり。』】おん身なり。［縮］。＊［縮］は誤植。

〈16〉この群は聲高く笑ひぬ。少女、「さては畫額ならぬ我姿と、君との間にも、その花うりの子立てりと覺えたり。我を誰とかおもひ玉ふ。」起ちあがりて、眞面目なりとも、戯なりとも、知られぬ様なる聲にて、「われはその菫化うりなり。君が情の報はかくこそ。」少女は卓越しに伸びあがりて、俯きゐたる巨勢が頭を、ひら手にて抑へ、その額に接吻しぬ。①②③④

②【眞面目なりとも、戯なりとも、】眞面目なりとも戯なりとも、［美・改・塵・縮］。③【聲にて、】聲にて。［美・改・塵・縮］。④【接吻しぬ】接吻しつ［美・改・塵・縮］。

〈17〉この騒ぎに少女が前なりし酒は覆へりて、裳にかゝり、卓の上にこぼれたるは、蛇の如く這ひて、人々の前へ流れよらむとす。巨勢は熱き手掌を、兩耳の上におぼえ、驚く間もなく、またこれより熱き唇、額に觸れたり。「我友に目を廻させたまふな。」とエキステル呼びぬ。人々は半ば椅子より立ちて「いみじき戯かな」。と一人がいへば、「われらは繼子なるぞくやしき。」と外の一人いひて笑ふを、余所なる卓よりも、皆興ありげにうち守りぬ。①②③④⑤

①【裳にかゝり】裳を浸し［塵］。③【エキステル】エクステル［縮］。④【戯かな」。と】戯かな、」と［美・改・塵・縮］。【くやしき。】くやしき、」［美・改・塵・縮］。⑤【余所なる】餘所なる［塵・縮］。

〈18〉少女が側に坐したりし一人は、「われをもすさめ玉はむや」。といひて、右手さしのべて少女が腰をかき抱きぬ。少女は「さても禮儀知らずの繼子どもかな、汝等にふさはしき接吻のしかたこそあれ。」と叫び、ふりほどきて突立ち、美しき目よりは稲妻出づと思ふばかり、しばし一座を睨みぬ。巨勢は唯、呆れに呆れて見居たりしが、この時の少女が姿は、すみれうりにも似ず、「ロオレライ」にも似ず、さながら凱旋門上の「バワリヤ」なりと思はれぬ。

①【坐したりし】**坐り**たりし［縮］。【玉はむや。】玉はむや、」［美・改・塵・縮］。②【かき抱きぬ】かき抱き**つ**［美・改・塵・縮］。④【睨みぬ】睨み**つ**［美・改・塵・縮］。【唯、呆れ】唯呆れ［美・改・塵・縮］。【少女が姿は】少女**の**姿は［縮］。【すみれうり】**菫花**うり［塵］。⑤【バワリヤ】バワリヤ［美・改］バワリ**ア**［塵］バワリ**ア**［縮］。

〈19〉少女は誰が飲みほしけむ咖啡碗に添へたりし「コップ」を取りて、中なる水を口に銜むと見えしが、唯一嘆、「繼子よ、繼子よ、汝等誰か美術のまゝ子ならざる。フロレンス派學ぶはミケランジエロ、ドルシイが幽靈、和蘭派學ぶはリユウベンス、フアン、ヂイクが幽靈、我國のアルブレヒト、ドユウレル學びたりとも、アルブレヒト、ドユウレルが幽靈ならぬは稀ならむ。會堂に掛けし『スツヂイ』二つ三つ、直段好く賣れたる曉には、われらは七星、われらは十傑、われらは十二『アポステル』と擅に見たてしてのわれぼめ。かゝるえり屑にミ子ルワの唇いかで觸れむや。わが冷たき接吻にて、滿足せよ」。とぞ叫びける。

①【咖啡碗】**珈琲**碗［美・改・塵・縮］。②【唯一嘆、「繼子よ】唯一嘆。「繼子よ［美・改・塵・縮］。【まゝ子】繼子［塵］。【フロレンス】**フイレンチエ**［塵］**フイレンチエ**［縮］。③【ドルシイ】**ヰンチイ**［改・塵］**ヰンチイ**［縮］。【和蘭派學ぶは】和蘭派學ぶは、［縮］。

【リユウベンス】ルウベンス［改・塵］ルウベンス［縮］。⑤【會堂に掛けし】會堂に掛けたる［塵］。【われらは七星、われらは】われらは七星われらは［美・改・塵］我等は七星、われらは［縮］。⑥【十二『アポステル』】十二使徒［塵］。【われぼめ】われぽめ［美］。＊［美］は誤植。【ミ子ルワ】ミネルワ［塵］ミ子ルワ［縮］。⑦【満足せよ】。とぞ】満足せよ。」とぞ［美・改・塵・縮］。

〈20〉噴きかけし霧の下なる此演説、巨勢は何事とも辨へねど、時の繪畫をいやしめたる、諷刺をらむとのみは推測りて、その面を打仰ぐに、女神バワリヤに似たりとおもひし威嚴少しもくづれず。言畢りて卓の上におきたりし手袋の酒に濡れしを取りて、大股にあゆみて出でゆかむとす。

①【噴きかけし】噴掛けし［塵］。②【バワリヤ】バワリア［塵］バワリア［縮］。【くづれず。】くづれず、［美・改・塵・縮］。③【濡れしを】濡れたるを［塵］。

〈21〉皆すさまじげなる氣色して、「狂人」と一人いへば、「近きに報せでは止まじ」と外の一人いふを、戸口にて振りかへりて、「遺恨におもふべき事かは、月影にすかして見よ、額に血の迹はとゞめじ、吹きかけしは水なれば。」

①【止まじ】已まじ［塵］。②【振りかへりて】振りかへりて。［美・改・塵・縮］。【遺恨におもふ】遺恨に思ふ［美・改・塵・縮］。③【とゞめじ】とゞめじ。［美・改・塵・縮］。

中

〈22〉あやしき少女の去りてより、程なく人々散じぬ。かへり路にエキステルに問へば、「美術學校にて雛形となる少女の一人にて、『フロイライン』ハンスルといふものなり。見たまひし如く奇怪なる振舞するゆゑ、狂女なりともいひ、また外の雛形娘とちがひて、人に肌見せねば、片輪ならむといふもあり。その履歴知るものなけれど、教ありて氣象よの常ならず、汙れたる行なければ、美術諸生の仲間には、喜びて友とするもの多し。善き雛形なるとは見たまふ如し。」と答へぬ。巨勢、「我畵かくにもえうあるべきものなり。『アテリエ』とゝのはむ日には、來よと傳へたまへ。」エキステル、「心得たり。されど十三の花賣娘にはあらず、裸體の研究、危しとはおもはずや。」巨勢、「裸體の雛形せぬ人と君もいひしが。」エキステル「現にいはれたり。されと男と接吻したるも、けふ始めて見ぬ。」

①【人々散じぬ。】人々**あらけぬ**。[美・改・塵・縮]。【かへり路に】**歸り**路に[美・改・塵・縮]。【エキステル】エクステル[縮]。③【雛形娘とちがひて】雛形娘と**違**ひて[塵]。④【片輪ならむと】**かたはにやと**[改・塵・縮]。⑤【善き雛形なる】善き**首**なる[塵・縮]。⑥【えうある】**よ**うある[改・塵・縮]。【『アテリエ』】『**アトリエ**』[改・塵・縮]。⑦【エキステル】エクステル[縮]。⑨【されと男と】されど男と[美・改・塵・縮]。【始めて見ぬ】始めて見**き**[美・改・塵・縮]。

〈23〉エキステルがこの言葉に、巨勢は赤うなりしが、街燈暗きシルレル、モヌメントのあたりなりしかば、友は見ざりけり。巨勢が「ホテル」の前にて、二人は袂を分ちぬ。

①

②

①*［塵］では「エキステルが」の前で改行されず、前節に続いている。［美・改］では前文の「始めて見ぬ。」が行末で終わっているため、改行の有無は不詳。①【エキステル】エクステル［縮］。【赤うなりしが】赤うなりしか［縮］。【シルレル、モヌメント】「シルレル、モヌメント」［美・改・塵・縮］。

〈24〉一週ほど後の事なりき、エキステルが周旋にて、美術學校の「アテリェ」一間を巨勢に借されぬ。南に廊下ありて、北面の壁は硝子の大窓に半を占められ、隣の間とのへだてには唯帆木綿の幌（とばり）あるのみ。頃はみな月半ばなれば、旅立ちし諸生多く、隣に人もあらず、業（わざ）妨ぐべき憂なきを喜びぬ。

①【一週ほど】一週程［塵］。【事なりき、】事なりき。［塵］。【エキステル】エクステル［縮］。【「アテリエ」】「アトリエ」［改・塵・縮］。

〈25〉巨勢は畫額の架（たい）の前（スタッフアンジュ）に立ちて、今入りし少女に「ロオレライ」の畫を指ざししめして、「君に聞かれしはこれなり。面白げに笑ひたはふれ玉ふときは、似たりとも思はねど、をり〳〵君がおも影の、この姿と見まがふばかりなるときあり。殊にたがはぬは目なり。」

①*［塵］では「巨勢は」の前で改行されず、前節に続いている。【「ロオレライ」の畫を】架の側なる下畫を［縮］。【指ざししめして】指さしさめして［美・改］。指さし示めして［塵］指さししめして［縮］。②【似たりとも思はねど、】さしもおもはれねど、［改・塵・縮］。③【この姿と見まがふばかりなるときあり。殊にたがはぬは目なり。】こゝに入れん人物にいとふさはしきときあり。［改］こゝなる未成の人物にいとふさはしきときあり。［塵］こゝにをらせん人物にいとふさはしきときあり。［縮］。

〈26〉少女は高く笑ひて、「物忘したまふな、おん身が『ロオレライ』の本の雛形、すみれ賣の子は我なりとは、先の夜も告げしものを。」かくいひしが俄に色を正して、「おん身は我を信じたまはず、げにそれも無理ならず。世の人は皆我を狂女なりといへば、さおもひたまふならむ。」この聲戯とは聞えず。

①【笑ひて、】笑ひて。[美・改・塵・縮]。【したまふな、】したまふな。[美・改・塵・縮]。②【正して】正して。[美・改・塵・縮]。【信じたまはず、】信じたまはず。[縮]。③【無理ならず。】無理ならす。[塵]。＊[塵]は誤植。

〈27〉巨勢は半信半疑したりしが、忍びかねて少女にいふ、「餘りに久しくさいなめ玉ふな。今も我額に燃ゆるは君が唇なり。はかなき戯とおもへば、さひて忘れむとせしと、幾度か知らねど、迷は遂に晴れず。あはれ君がまことの身の上、苦しからずは聞かせ玉へ。」

①【少女にいふ】少女にいふ。[縮]。【さいなめ玉ふな】さいなみ玉ふな [塵]。②【我額】我が額 [美・改・塵・縮]。【君が唇】君の唇 [縮]。【さひて】しひて [塵・縮]。③【苦しからずは聞かせ】苦しからずば聞かせ [縮]。

〈28〉窓の下なる小机に、いま行李より出したる舊き繪入新聞、遺ひさしたる油ゑの具の錫筒、粗末なる烟管にまだ卷烟草の端の殘れるなど載せたるその片端に、巨勢はつら杖つきたり。少女は前なる籐の椅子に腰かけて、語りいでぬ。

①【繪入新聞】繪入新間 [縮] ＊[縮]は誤植。

〈29〉「まづ何事よりか申さむ。此學校にて雛形の鑑札受くるときも、ハンスルといふ名にて通し ①
たれど、そは我眞の名にあらず。父はスタインバハとて、今の國王に愛でられて、ひと時榮 ②
えし畫工なりき。わが十二の時、王宮の冬園（ふゆぞの）に夜會ありて、二親みな招かれぬ。宴闌なる頃、 ③
國王見えざりければ、人々驚きて、移植（井ンテルガルデン）ゑし熱帶艸木いやが上に茂れる、硝子屋根（がらすやね）の下、そ ④
こかこゝかと搜しもとめぬ。園の片隅にはタンダルヂニスが刻める、フアウストと少女との ⑤
名高き石像あり。わが父のそのあたりに來し時、胸割くるばかりの聲して、『助けて、〳〵』 ⑥
と叫ぶものあり。聲をしるべに、黃金の穹窿（まるてんじやう）おほひたる、『キオスク』（四阿屋）の戸口に ⑦
立寄れば、周りに植ゑし櫻欄の葉に、瓦斯燈の光支へられたるが、濃き五色にて畫きし、窓 ⑧
硝子を洩れて、さしこみ、薄暗くあやしげなる影をなしたる裡に、一人の女の逃げむとすま ⑨
ふを、ひかへたるは王なり。その女のおもて見し時の、父が心はいかなりけむ。かれは我母 ⑩
なりき。父はあまりの事に、しばしたゆたひしが、『許したまへ、陛下』と叫びて、王を推 ⑪
倒しぬ。そのひまに母は走りのきしが、不意を打たれて倒れし王は、起き上りて父に組付き ⑫
ぬ。肥えふとりて多力なる國王に、父はいかでか敵し得べき、組敷かれて、側なりし如露に ⑬
てしたゝか打たれぬ。この事知りて諫めし、内閣の秘書官チイグレルは、ノイシユワンスタ ⑭
インなる塔に押籠めらるべき筈なりしが、救ふ人ありて助かりにき。われは其夜家にありて、 ⑮
二親の歸るを待ちしに、下女來て父母歸り玉ひぬといふ。喜びて出迎ふれば、父は舁かれて ⑯
歸り、母は我を抱きて泣きぬ。」 ⑰

①【通したれど】通しぬれど［縮］。③【冬園に夜會】冬園の夜會［縮］。［美・改・塵・縮］。⑥【來し時】來たりし時［塵］。【胸割くる】胸裂くる［塵］。【ばかりの】やうなる［改・塵・縮］。⑧【周りに植ゑ
④【熱帶艸木】熱帶草木［縮］。搜しもとめぬ。】搜しもとめつ。

し】周圍に茂れる［塵］。⑨【洩れて、さしこみ】洩れてさしこみ［美］洩りてさしこみ［改・塵・縮］。⑩【父が心】父の心［縮］。⑪【許したまへ】許したやへ［塵］。＊［塵］は誤植。【推倒しぬ】推倒しつ［美・改・塵・縮］。⑫【起き上りて】起き上りし［塵］。⑬【敵し】敵し［美・改・塵・縮］⑭【ノイシユワンスタイン】ノイシユワンスタイン［美・改・塵］ノイシユワンスタイン［縮］。⑮【押籠めらるべき筈】押籠めらるる筈［塵］。【助かりにき】助けられき［改・塵・縮］。⑯【父は昇かれて】父昇かれて［塵］。⑰【抱きて】抱いて［縮］。

〈30〉少女は暫らく黙しぬ。けさより曇りたる空は、雨になりて、をり〳〵窓を打つ雫、はら〳〵 ①
と音す。巨勢いふ、「王の狂人となりて、スタルンベルヒの湖に近き、ベルヒといふ城に遷 ②
され玉ひしとは、きのふ新聞にて讀みしが、さては其頃よりかゝる事ありしか。」 ③

①【黙しぬ】黙しつ［美・改・塵・縮］。【はら〳〵と】はらはらと［縮］。
②【巨勢いふ、】巨勢いふ。［美・改・塵・縮］。③【きのふ新聞にて】きのふの新聞にて［縮］。

〈31〉少女は語を繼ぎて、「王の繁華の地を嫌ひて、田舍にのみ住み、晝寐ねて夜起きたまふは、 ①
久しき程の事なり。獨逸、佛蘭西の戰ありし時、加特力派の國會に打勝ちて、普魯西方(がた)につ ②
きし、王が中年のいさをは、次第に暴政の噂に掩はれて、公けにこそ言ふものなけれ、陸軍 ③
大臣メルリンゲル、大藏人臣リイデルなど、故なくして死罪に行はれむとしたるを、其筋に ④
て秘したるは、誰知らぬものなし。王の晝寐し玉ふときは、近衆みな郤けられしが、囈語(うはごと)に ⑤
マリイといふと、あまたゝびいひたまふを聞きしものありといふ。我母の名もマリイといひ ⑥
ぬ。望なき戀は、王の病を長ぜしにはあらずや。母はかほばせ我に似たる處ありて、その美 ⑦
しさは宮の内にて類なかりしと聞きぬ。」 ⑧

①【繼ぎて、】繼ぎて。[美・改・塵・縮]。【田舎にのみ住み】鄙に住まひ[塵]。④【死罪】死刑[塵]。【したるを】しぬるを[縮]。⑤【秘したるは】秘めたるは[美・改・塵・縮]。⑥【いひたまふを】いひ給ふを[縮]。【聞きしものあり】聞きしもあり[美・改・塵]。【いひぬ。】いひき。[美・改・塵・縮]。⑦【長ぜしには】長ぜしに[美・改・塵・縮]。⑧【類なかりしと聞きぬ】類なかりきと聞きつ[美・改・塵・縮]。

〈32〉「父は間もなく病みて死にき。交廣く、もの惜みせず、世事には極めて疎かりければ、家に遺財つゆばかりもなし。それよりダハハウエル街の北のはてに、裏屋の二階明きたりしを、借りて往みしが、そこに遷りてより、母も病みぬ。かゝる時にうつろふものは、人の心の花なり。數知らぬ苦しき事は、わが稺き心に、早く世の人を憎ましめぬ。明る年の一月、謝肉祭の頃なりき、家財衣類なども賣盡して、日々の烟も立てかぬるやうになりしかば、貧しき小供の群に入りてわれも菫花賣るとを覺えぬ。母のみまかる前、三日四日の程を安く送りしは、おん身の賜なりき。」

①
②
③
④
⑤
⑥
⑦

②【二階明きたりしを、借りて】二階明きたりしを借りて[塵]二階の明きたりしを、借りて[縮]。③【往みしが】住みしが[美・改・塵・縮]。＊[底]は誤植。④【憎ましめぬ】憎ましめき[美・改・塵・縮]。⑤【頃なりき〻】頃なりき。[縮]。【衣類なども】衣類なとも[改]。＊[改]は誤植。⑥【小供】子供[美・改・塵・縮]。【覺えぬ】覺えつ[美・改・塵・縮]。

〈33〉「母のなきがら片付けなどするとき、世話せしは、一階高くすまひたる仕立屋なり。あはれなる孤ひとり置くべきにあらずとて、迎取られしを喜びしと、今おもひ出しても口惜しき程なり。仕立屋には、娘二人ありて、いたく物ごのみして、みづから衒ふさまなるを見しが、

①
②
③

迎取られてより伺へば、夜に入りて屢々客あり。酒などみて、はては笑ひ罵り、また歌ひ④
などす。客は外國の人多く、おん國の學生なども見たるやうなりき。或る日主人われにも新⑤
しき衣着よといひしが、そのをり我を見て笑ひし顔、何となく怖ろしく、小供心にもうれし⑥
とはおもはざりき。午すぎし頃、四十ばかりなる知らぬ人來て、スタルンベルヒの湖水へ往⑦
かむといふを、主人も俱に勸めぬ。父の世に在りしとき、伴はれてゆきし嬉しさ、猶忘れざ⑧
りしかば、しぶり〳〵諾ひしを、「かくてこそ善き子なれ」とみな譽めぬ。連れなる男は、⑨
途にてもやさしくのみ扱ひて、かしこにては『バワリヤ』といふ座敷船に乘り、食堂にゆき⑩
て物喰はせつ。酒もすゝめたれど、そは慣れぬものなれば、辭みて飲まざりき。ゼエスハウ⑪
プトに船はてしとき、その人はまた小舟を借り、これに乘りて遊ばむといふ。暮れゆくそら⑫
に心細くなりしわれは、早やかへらむといへど、聽かずして漕出で、岸邊に添ひてゆくほど⑬
に、人げ遠き葦間に來しが、男は舟をそこに停めぬ。わが年はまだ十三にて、初は何事とも⑭
わきまへざりしが、後には男の面色もかはりておそろしく、われにもあらで、水に躍入りぬ。⑮
暫しありて我にかへりしときは、湖水の畔なる漁師の家にて、貧しげなる夫婦のものに、介⑯
抱せられて居たりき。歸るべき家なしと言張りて、一日二日と過す中に、漁師夫妻の質朴な⑰
るに馴染みて、不幸なる我身の上を打明けしに、あはれがりて娘として養ひぬ。ハンスルと⑱
いふは、この漁師の名なり。」⑲

①【仕立屋なり】**裁縫師**なり［塵］。③【仕立屋】**裁縫師**［塵］。④【屢々】屢々［塵・縮］。【また歌ひなどす。】**歌うたひ**などす。［縮］。⑤【見たるやうなりき。】**見えし**やうなりき。［美・改・塵・縮］。【新しき衣】新**なる**衣［縮］。⑥【そのをり我を見て】そのをり**その男の**我を見て［塵］。【小供心】子供心［改・塵・縮］。⑧【勸めぬ】勸め**き**［美・改・塵・縮］。⑨【しぶり〳〵】しぶ〳〵［塵・縮］。【諾ひしを】諾ひ**つる**を［塵］。【みな譽めぬ】みな譽め**つ**［美・改］みな譽め**つ**［塵・縮］。⑨＊［縮］では「連れなる男」の前で改行されている。⑩【途にて

も】途にて［塵］。【『バワリヤ』】『バワリア』［塵・縮］。⑪【物喰はせつ。】物食はせつ。［塵］。【すゝめたれど】すゝめぬれど［塵］。⑫【その人はまた】その人は又［縮］。【小舟を借り、これに】小舟を借りこれに［美・改］。⑬【早や】はや［塵］。⑭【來しが】來りしが［塵］。【停めぬ】停めつ［美・改・塵・縮］。⑮【面色】顔色［塵］。⑰【漁師夫妻の】漁師夫婦の［美・改・塵・縮］。

〈34〉「かくて漁師の娘とはなりたれど、弱き身には舟の櫂取るともかなはず、レオニのあたりに、富める英吉利人の住めるに雇はれて、小間使となりぬ。加特力教信ずる養父母は、英吉利人に使はるゝを嫌ひたれど、わが物讀むとなど覺えしは、かの家なりし雇女教師の惠なり。女教師は四十餘の處女なりしが、家の娘のたかぶりたるよりは、我を愛すると深く、三年が程に多くもあらぬ教師の藏書、悉く讀みぬ。ひがよみはさこそ多かりけめ、又ふみの種類もまち〳〵なりき。クニツゲが交際法あれば、フムボルトが長生術あり。ギヨオテ、シルレルの詩抄半ばじゆしてキヨオニヒが通俗の文學史を繙き、あるはルウブル、ドレスデンの畫堂の寫眞繪、繰りひろげて、テエンが美術論の譯書をあさりぬ。」

①【なりたれど】なりぬれど［塵］。②【小間使となりぬ】小間使になりぬ［美・改・塵・縮］。③【嫌ひたれど】嫌ひぬれど［塵］。【かの家】彼家［塵］。⑤【悉く讀みぬ】悉く讀みき［美・改・塵・縮］。【多かりけめ、又】多かりけめ。又［美・改・塵・縮］。⑥【ギヨオテ、シルレルの】ギヨオテ、シルレルの［美・改・塵］ギヨオテ、シルレルの［縮］。⑦【ルウブル】ルウヴル［塵］。⑧【テエン】テエヌ［塵］テエヌ［縮］。

〈35〉「去年英吉利人一族を率ゐて國に歸りし後は、然るべき家に奉公せばやとおもひしが、身元善からねば、ところの貴族などには使はれず。此學校の或る教師に、端なくも見出されて、雛形勤めしが緣となりて、遂に鑑札受くることゝなりしが、われを名高きスタインバハが娘

なりとは知る人なし。今は美術家の間に立ちまじりて、唯面白くのみ日を暮せり。されどグ④
スタアフ、フライタハは流石そら言いひしにあらず、美術家ほど世に行儀悪きものなければ、⑤
獨立(ひとりだ)ちて交るには、しばしも油斷すべからず。寄らず、障はらぬやうにせばやとおもひて、⑥
計らず見玉ふ如き不思議の癖者となりぬ。をり〳〵は我身、みづからも狂人にはあらずやと⑦
疑ふばかりなり。これにはレオニにて讀みしふみも、少し崇をなすかとおもへど、若し然ら⑧
ば世に博士と呼はるゝ人は、抑々いかなる狂人ならむ。われを狂人と罵る美術家等、おのれ⑨
らが狂人ならぬを憂へこそすべきなれ。英雄豪傑、名匠大家となるには、多少の狂氣なくて⑩
かなはぬとは、ゼ子カが論をも、シエキスピヤが言葉をも待たず。見玉へ、我學問の博きを。⑪
狂人にして見まほしき人の、狂人ならぬを見る、その悲しさ。狂人とならでもよき國王は、⑫
狂人となりぬと聞く、それも悲し。悲しきとのみ多ければ、晝は蟬と共に泣き、夜は蛙と共⑬
に泣けど、あはれといふ人もなし。おん身のみは情なくあざみ笑ひ玉はじとおもへば、心の⑭
ゆくまゝに語るを咎め玉ふな。嗚呼、かういふも狂氣か。」⑮

②【使はれず。】使はれず、[縮]。【此學校】この學校 [美・改・塵・縮]。③【縁となりて】縁になりて [美・改・塵・縮]。④【グスタアフ、フライタハ】グスタアフ・フライタハ [塵] グスタアフ、フライタハ [縮]。⑤【いひしにあらず、】いひしにあらず。[美・改・塵・縮]。【惡きもの】惡しきもの [塵]。⑥【障はらぬ】障らぬ [塵]。⑦【癖者となりぬ】癖者になりぬ [美・改・塵・縮]。⑧【疑ふばかりなり】疑ふ程なり [縮]。【レオニ】レオニ [改・塵] レオニ [縮]。【少し】小し [塵]。【崇】崇 [美・改・塵・縮]。＊[底] は誤植。⑨【呼はるゝ】呼ばるゝ [塵・縮]。【抑々】抑〻 [塵・縮]。⑪【かなはぬとは】愜はぬとは [塵]。【ゼ子カ】ゼネカ [塵] ゼネカ [縮]。【シエキスピヤ】シエ丶クスピヤ [美・改] シエ丶クスピア [塵] シエエクスピア [縮]。＊[美・改] は傍線が一字分短い。【言葉】言 [美・改・塵・縮]。⑫【見る、その】見るその [美・改・縮]。【狂人とならでも】狂人にならでも [美・改・塵・縮]。⑬【狂人となりぬ】狂人になりぬ [美・改・塵・縮]。

下

〈36〉定なき空に雨歇みて、學校の庭の木立のゆるげるのみ曇りし窓の硝子にすかして見ゆ。少女 ①
が話聞く間。巨勢が胸には、さま〳〵の感情戰ひたり。或るときはむかし別れし妹に逢ひた ②
る兄の心となり、或るときは廢園に僵れ伏たる「ヱヌス」の石像に、心惱す彫工の心となり、 ③
或るときは又艶女に心動され、われは墮ちじと戒むる沙門の心ともなりしが、聞きをはりし ④
時は、胸騒ぎ肉顫へて、われにもあらで、少女が前に跪かむとしぬ。」少女はつと立ちて、 ⑤
「この部屋の暑さよ。早や學校の門(かど)もさゝるゝ頃なるべきに、雨も晴れたり。おん身となら ⑥
ば、おそろしきともなし。共にスタルンベルヒへ往き玉はずや」。と側なる帽取りて戴きぬ。 ⑦
そのさま巨勢が共に行くべきを、つゆ疑はぬやうなり、巨勢は唯、母に引かるゝ穉子の如く ⑧
從ひゆきぬ。 ⑨

①【硝子にすかして】硝子**をとほして**［塵］。②【話聞く間。巨勢が】話聞く間、巨勢が［美・改・塵・縮］。②【或るときはむかし】或ときはむかし［美・改・塵・縮］。③【或るときは廢園に】或ときは廢園に［美・改・塵・縮］。【僵れ伏たる】僵れ伏**した**る［塵］。【「ヱヌス」の石像】ヱヌスの石像［美・改］ヱヌスの**像**［塵］ヱヌスの石像［縮］。③【心惱す】**獨惱める**［美・改・塵・縮］。⑤【肉顫へて】肉顫**ひて**［美・改・塵・縮］。【跪かむとしぬ。】跪かむとし**つ**。［美・改・塵・縮］。＊［底］のかぎ括弧は誤植。【つと立ちて、】つと立ちて［美・改・塵］つと立ちて。［縮］。⑥【早や】**は**や［塵］。⑦【玉はずや。】玉はずや。」［美・改・塵・縮］。【戴きぬ】戴き**つ**［美・改・塵・縮］。⑧【つゆ疑はぬやうなり、】つゆ疑は**ずと覺し**。［美・改・塵・縮］。【唯、母に】唯母に［美・改・塵・縮］。

〈37〉門前にて馬車雇ひて走らするに、程なく停車場に來ぬ。けふは日曜なれど、天氣惡しければ ①

にや、近郷より歸る人も多からで、こゝはいと靜なり。新聞の號外賣る婦人あり。買ひて見 ②
れば、國王ベルヒの城に遷りて、容躰穩なれば、侍醫グッデンも護衛を弛めさせしとなり。 ③
瀘車中には、湖水の畔にあつさ避くる人の、物買ひに府に出でし歸るさなるが多し。王の噂 ④
いと喧し。「まだホオヘンシユワンガウの城に居たまひし時には似ず、王の心鎮まりたるや ⑤
うなり。ベルヒに遷さるゝ途中、ゼエスハウプトにて水求めて飲みたまひしが、近きあたり ⑥
なりし漁師等を見て、やさしく頷きなどしたまひぬ。」と訛りたる言葉にて語るは、かひも ⑦
の籠手にさげたる老女なりき。 ⑧

②【歸る人】歸へる人［美・改］かへる人［塵］。③【容躰】容體［塵・縮］。【弛めさせしと】弛めさせきと［美・改・塵・縮］。④【瀘車中には、湖水の】瀘車中には湖水の［美・改・塵・縮］。⑤【似ず、王の心】似ず、心［塵］。⑥【ゼエスハウプト】ゼエスハウプト［塵］ゼエスハウプト［縮］。【近きあたり】近きわたり［美・改・塵・縮］。⑦【訛りたる言葉にて】訛みたるとばにて［改・縮］訛みたることばにて［塵］。

〈38〉車走ると一時間、スタルンベルヒに着きしは夕の五時なり。かちより往きてやう〳〵一日路 ①
の處なれど、はやアルペン山の近さを、唯何となく覺えて、このくもらはしき空の氣色にも、 ②
胸開きて息せらる。車のあちこちと廻來し、丘陵の忽開けたる處に、ひろ〴〵と見ゆるは湖 ③
水なり。停車場は西南の隅に在りて、東岸なる林木、漁村はゆふ霧に包まれてほのかに認め ④
らるれど、山に近き南の方は、一望きはみなし。 ⑤

①【一日路】一日程［塵］。②【覺えて、この】覺えて、此［塵］覺えてこの［縮］。③【見ゆるは】見みるは［塵］。＊［塵］は誤植。⑤【南の方は、一望】南の方は一望［美・改・塵・縮］。

〈39〉案内知りたる少女に引かれて、巨勢は右手なる石段を上ぼりて見るに、こゝは「バワリヤ」の庭といふ「ホテル」の前にて、屋根なき所に石卓、椅子など並べたるが、けふは雨後なればしめ〳〵と人げ少し。給仕する僕の黒き上衣に、白の前掛したるが、何事をかつぶやきながら、卓に倒しかけたる椅子を、引起して拭ひゐたり。ふと見れば片側の軒にそひて、蘿の蔓からませたる架ありて、その下なる圓卓を圍みたるひと群の客あり。こは此「ホテル」に宿りたる人々なるべし。男女打ちまじりたる中に、先の夜「ミヲルワ」にて見し人ありしかば、巨勢は往きてものいはむとせしに、少女おしとゞめて、「かしこなるは、君の近づきたまふべき群にあらず。われは年若き人と二人にて來たれど、愧づべきはかなたに在りて、こなたにあらず。彼はわれを知りたれば、見玉へ、久しく座にえ忍びあへで隠るべし。」とばかりありて、彼美術諸生は果して起ちて「ホテル」に入りぬ。少女は僕を呼びちかづけて、座敷船はまだ出づべきやと問ふに、僕は飛行く雲を指さして、この覺束なきそらあひなれば、最早出でざるべしといふ。さらば車にてレオニに行かばやとて言付けぬ。

①【石段を上ぼりて】石段をのぼりて［塵］。【「バワリヤ」】「バワリア」［塵・縮］。②【椅子など並べ】椅子抔並べ［塵］。③【つぶやきながら】つぶやきつつも［改］つぶやきつゝも［塵・縮］。④【蘿の蔓】つた蔓［改・塵・縮］。⑥【「ミヲルワ」】「ミネルワ」［塵・縮］。⑦【ものいはむとせしに】ものいはんとせしに［縮］。【おしとゞめて】おしとゞめて。［美・改・塵・縮］。⑧【あらず。】あらず、［縮］。【來たれど】來たれと［改・塵・縮］。【在りて】ありて［塵］。⑪【出づべきや】出づべしや［改・塵・縮］。【指さして】指して［縮］。⑫【行かばやとて言付けぬ】行かばやと言付けぬ［縮］。

〈40〉馬車來ぬれば、二人は乘りぬ。停車場の傍より、東の岸邊を奔らす。この時アルペンおろし

さと吹來て、湖水のかたに霧立ちこめ、今出でし邊をふりかへり見るに、次第々々に鼠色に②
なりて、家の棟、木のいたゞきのみ一きは黑く見えたり。御者ふりかへりて、「雨なり。母③
衣掩ふべきか。」と問ふ。「否」と應へし少女は巨勢に向ひて、「こゝちよの此遊や。むか④
し我命喪はむとせしも此湖の中なり、我命拾ひしもまた此湖の中なり。さればいかでとおも⑤
ふおん身に、眞心打明けてきこえむもこゝにてこそとおもへば、かくは誘ひまつりぬ。「カ⑥
ツフエ、オリヤン」にて耻かしき目にあひけるとき、救ひたまわりし君また見むとおもふ心⑦
を命にて、幾歳をか經にけむ。先の夜「ミ子ルワ」にておん身が物語聞きしときのうれしさ。⑧
日頃木のはしなどのやうにおもひし美術諸生の仲間なりければ、人あなづりして不敵の振舞⑨
せしを、はしたなしとや見玉ひけむ。されど人生いくばくもあらず。うれしとおもふ一彈指⑩
の間に、口張りあけて笑はずは、後にくやしくおもふ日あらむ。」かくいひつゝ被りし帽を⑪
脫棄てゝ、こなたへふり向きたる顏は、大理石脉に熱血跳る如くにて、風に吹かるゝ金髮は、⑫
首打振りて長く嘶ゆる駿馬の鬣に似たりけり。「けふなり。けふなり。きのふありて何かせ⑬
む、あすも、あさても空しき名のみ、あだなる聲のみ。」⑭

①【乘りぬ】乘移りぬ[縮]。③【ふりかへりて】ふりかへりて。[美・改・塵・縮]。④【向ひて】向ひて。[美・改・塵・縮]。⑤【せしも此湖の中なり】せしも此湖の中なり。[美・改・塵・縮]。⑥【おもへば】思へば[美・改・塵・縮]。【「カツフエ、オリヤン」】「カツフエゝ、オリヤン」[美]「カツフエゝ、ロリヤン」[改]『カツフエエ、ロリアン』[塵]「カツフエエ、ロリアン」[縮]。⑦【救ひたまわりし】救ひたまはりし[美・改・縮]救ひ玉はりし[塵]。【君また】君をまた[塵]。【見むとおもふ心】見むと思ふ心[縮]。⑧【「ミ子ルワ」】『ミネルワ』[塵]「ミネルワ」[縮]。【うれしさ。】うれしさ、[美・改・塵・縮]。⑪【笑はずは】笑はずば[塵・縮]。⑬【何かせむ、】何かせむ。[美・改・塵・縮]。

〈41〉この時、二點三點、粒太き雨は車上の二人が衣を打ちしが、瞬くひまに繁くなりて、湖上よ ①
りの横ぶき、あらゝかにおとづれ來て、紅を潮したる少女が片頰に打ちつくるを、さし覗 ②
く巨勢が心は、唯そらにのみやなりゆくらむ。少女は伸びあがりて、「御者、酒手は取らす ③
べし、疾く驅れ、一策加へよ、今一策」。と叫びて、右手に巨勢が頸を抱き、己れは項をそ ④
らせて仰視たり。巨勢は絮の如き少女が肩に、我頭持たせ、たゞ夢のこゝちして其の姿を見 ⑤
たりしが、彼凱旋門上の女神バワリヤまた胸に浮びぬ。 ⑥

②【横ぶき】横しぶき［美・改・塵・縮］。【少女が片頰】少女の片頰［縮］。③【あがりて、】あがりて。［美・改・塵・縮］。【御者】馭者［縮］。【取らすべし、】取らすべし。［美・改・塵・縮］。④【疾く驅れ、】疾く驅れ。［美・改・塵・縮］。【今一策。】今一策。」［美・改・塵］又一策。」［縮］。⑤【我頭持たせ】我頭を持たせ［塵］。【其の姿】その姿［塵・縮］。⑥【バワリヤ】バワリア［塵］バワリア［縮］。

〈42〉國王の棲めりといふベルヒ城の下に來し頃は、雨彌々劇しくなりて、湖水のかたを見わたせ ①
ば、吹寄する風一陣々、濃淡の竪縞おり出して、濃き處には雨白く、淡き處には風黑し。御 ②
者は車を停めて、「しばしが程なり。餘りに濡れて客人も風や引き玉はむ、又舊びたれども ③
此車、いたく濡らさば、主人の嗔に逢はむ。」といひて、手早く母衣打掩ひ、又一鞭あてゝ ④
急ぎぬ。 ⑤

①【彌々】彌々［美・改・縮］。②【御者】馭者［縮］。③【停めて、】停めて。［美・改・塵・縮］。

〈43〉雨なほをやみなくふりて、神をどろ〳〵しく鳴りはじめぬ。路は林の間に入りて、この國の ①

夏の日は、まだ高かるべき頃なるに、木下道ほの暗うなりぬ。夏の日に蒸されたりし草木の、②
雨に濕ひたるかをり車の中に吹入るを、渇したる人の水飲むやうに、二人は吸ひたり。鳴神③
のおとの絶間には、おそろしき天氣に怯(おく)れたりとも見えぬ「ナハチガル」鳥の、玲瓏たる聲④
振りたてゝしばなけるは、淋しき路を獨ゆく人の、ことさらに歌うたふ類にや。この時マリ⑤
イは諸手(もろて)を巨勢が項に組合せて、身のおもりを持たせかゝりたりしが、木蔭を洩る稲妻に照⑥
らされたる顔、見合せて笑を含みぬ。あはれ二人は、我を忘れ、わが乘れる車を忘れ、車の⑦
外なる世界をも忘れたりけむ。⑧

①【なほをやみなく】猶をやみなく［美・改・塵・縮］。【神をどろ〳〵しく】神おどろ〳〵しく［美・改・塵・縮］。②【夏の日は、まだ】夏の日はまだ［美・改・塵・縮］。⑥【かゝりたりしが】かけたりしが［美・改・塵・縮］。⑦【顔、見合せて】顔見合せて［縮］。【笑を含みぬ】笑を含みつ［美・改・塵・縮］。【二人は、我を】二人は我を［美・改・塵・縮］。

〈44〉林を出でゝ、阪路を下るほどに、風村雲を拂ひさりて、雨も亦歇みぬ。湖の上なる霧は、重①
ねたる布を一重、二重と剝ぐ如く、束の間に晴れて、西岸なる人家も、また手にとるやうに②
見ゆ。唯こゝかしこなる木下蔭を過ぐるごとに、梢に殘る風に拂はれて落る露を見るのみ。③

③【殘る風に】殘る露の風に［塵］。【落る露を】落つるを［塵］。

〈45〉レオニにて車を下りぬ。左に高く聳ちたるは、所謂ロットマンが岡にて、「湖上第一勝」と①
題したる石碑の建てる處なり。右に伶人レオニが開きしといふ、水に臨める酒店あり。巨勢②

が腕にもろ手からみて、縋るやうにして歩みし少女は、この店の前に來て岡の方をふりかへ ③
りて、「わが雇はれし英吉利人の住みしは、此半腹の家なりき。老いたるハンスル夫婦が漁 ④
師小屋も、最早百歩が程なり。われはおん身をかしこへ、伴はむとおもひて來しが、胸騒ぎ ⑤
て堪へがたければ、此店にて憩はゞや。」巨勢は現にもとて、店に入りて夕餉跳ふるに、七 ⑥
時ならでは整はず、まだ三十分待ちたまはではかなはじ。」といふ。こゝは夏の間のみ客あ ⑦
る處にて、給仕する人も其年々に雇ふなれば、マリイを識れるもなかりき。 ⑧

②【開きしと】開きぬと［改・塵・縮］。⑥【跳ふるに、七時ならでは】跳ふるに、「七時ならでは［美・改・塵］。＊［底・縮］は鉤括弧の脱落。⑦【待ちたまはではかなはじ。」と】待ち給はではかなはじ、」と［美・改・塵・縮］。

〈46〉少女はつと立ちて、棧橋に繋ぎし舟を指ざし、「舟漕ぐとを知り玉ふか。」巨勢、「ドレス ①
デンにありし時、公園のカロラ池にて舟漕ぎしとあり、善くすといふにあらねど、君獨りわ ②
たさむほどの事、いかで做得ざらむ。」少女、「庭なる椅子は濡れたり。さればとて屋根の ③
下は、あまりに暑し。さばし我を載せて漕ぎ王へ。」 ④

①【指ざし】指さし［塵］。【巨勢、「ドレスデンに】巨勢「ドレスデンに［縮］。②【とあり、】ことあり、［塵］とあり。［縮］。④【さばし】しばし［美・改・塵・縮］。【漕ぎ王へ】漕ぎ玉へ［美・改・塵］漕玉へ［縮］。＊［底］の「王」は誤植。

〈47〉巨勢は脱ぎたる夏外套を少女に被せて小舟に乗らせ、われは櫂取りて漕出でぬ。雨は止みた ①
れど、天猶曇りたるに、暮色は早く岸のあなたに來ぬ。さきの風に揺られたるなごりにや、 ②

枇敲くばかりの波は猶ありけり。岸に沿ひてベルヒの方へ漕ぎもどす程に、レオニの村落果③
つるあたりに來ぬ。岸邊の木立絶えたる處に、眞砂路の次第に低くなりて、波打際に長椅子④
据ゑたる見ゆ。蘆の・叢舟に觸れて、さは〳〵と聲するをりから、岸邊に人の足音して、木⑤
の間を出づる姿あり。身の長六尺に近く、黑き外套を着て、手にしぼめたる蝙蝠傘を持ちた⑥
り。左手に少し引きさがりて隨ひたるは、鬚も髮も皆雪の如くなる翁なりき。前なる人は俯⑦
きて歩みきたれば、緣廣き帽に顏隱れて見えざりしが、今木の間を出でゝ湖水の方に向ひ、⑧
しばし立ちとゞまりて、片手に帽をぬぎ持ちて、打仰ぎたるを見れば、長き黑髮を、後ざま⑨
にかきて廣き額を露はし、面の色灰のごとく蒼きに、窪みたる目の光は人を射たり。舟にて⑩
は巨勢が外套を背に着て、蹲まり居たるマリイ、これも岸なる人を見居たりしが、この時俄⑪
に驚きたる如く、「彼は王なり」と叫びて立ちあがりぬ。背なりし外套は落ちたり。帽はさ⑫
きに脫ぎたるまゝ、酒店に置きて出でたれば、亂れたるこがね色の髮は、白き夏衣の肩にた⑬
を〳〵とかゝりたり。岸に立ちたるは、實に侍醫グッデンを引つれて、散歩に出でたる國王⑭
なりき。あやしき幻の形を見る如く、王は恍惚として少女が姿を見てありしが、忽一聲「マ⑮
リイ」と叫び、持ちたる傘投棄てて、岸の淺瀨をわたり來ぬ。少女は「あ」と叫びしが、そ⑯
の儘氣を喪ひて、巨勢が扶くる手のまだ及ばぬ間に、僵れしが、傾く舟の一搖りゆらるゝと⑰
共に、うつ伏になりて水に墜ちぬ。⑱

①【止みたれど】歇みたれど［美・改・塵・縮］。③【敲くばかりの】敲くほどの［改・塵・縮］。【ベルヒ】ペルヒ［美・改］。【漕ぎもどす】漕ぎ戻す［塵］。⑤【さは〳〵と】さわ〳〵と［美・改・塵・縮］⑧【歩みきたれば】歩み來ぬれば［塵］歩みきぬれば［縮］。⑨【打仰ぎたるを】打ち仰ぎたるを［美・改・塵・縮］。【後ざまに】後さまに［縮］。⑬【出でたれば】出でぬれば［塵］。⑮【少女が姿】少女の姿［塵］。

⑯【投棄てて】投棄てゝ［美・改・塵・縮］。⑯【叫びしが】叫びつゝ［塵］。⑰【及ばぬ間に、僵れしが】及ばぬ間に僵れしが［塵］。

〈48〉湖水はこの處にて、次第々々に深くなりて、勾配ゆるやかなりければ、舟の停まりしあたり①
も、水は五尺に足らざるべし。されど岸邊の砂は、やう〳〵粘土まじりの泥となりたるに、②
王の足は深く陷いりて、あがき自由ならず。その隙に隨ひたりし翁は、これも傘投棄てゝ追③
ひすがり、老いても力や衰へざりけむ、水を蹴て二足三足、王の領首むづと握りて引戻さむ④
とす。こなたは引かれじとするほどに、外套は上衣と共に翁が手に殘りぬ。翁はこれをかい⑤
やり棄てゝ、猶も王を引寄せむとするを、王はふりかへりて組付き、彼此たがひに聲だに立⑥
てず、暫し揉合ひたり。⑦

①＊［塵・縮］では「湖水は」の前で改行されず前節に続いている。［美・改］では前文の「墜ちぬ。」が行末で終わっているため、改行の有無は不詳。①【次第々々に】次第**次第**に［塵］。②【やう〳〵】やう**やう**［塵］。③【投棄てゝ】投棄てて［塵］。⑤【するほどに、外套は】するほどに外套は［塵］。⑥【引寄せむとするを】引寄せむとする**に**［塵］。

〈49〉是れ唯一瞬間の事なりき。巨勢は少女が墜つる時、僅に裳を握みしが、少女が蘆間隱れの杭①
に強く胸を打たれて、沈まむとするを、やう〳〵に引揚げ、汀の二人が爭ふを跡に見て、も②
と來し方へ漕ぎかへしぬ。巨勢は唯奈にしてか少女が命助けむとおもふのみにて、外に及ぶ③
に遑あらざりしなり。レオニイの酒店の前に來しが、こゝへは寄らず、是より百歩が程なり④
と聞きし、漁師夫婦が苫屋をさして漕ぎゆくに、日もはや暮れて、岸には「アイヘン」、「エ⑤
ルレン」などの枝繁りあひ廣ごりて、水は入江の形をなし、蘆にまじりたる水草に、白き花⑥

の咲きたるが、ゆふ闇にほの見えたり。舟には解けたる髪の泥水にまみれしに、藻屑かゝり ⑦
て僵れふしたる少女の姿、たれかあはれと見ざらむ。をりしも漕來る舟に驚きてか、蘆間を ⑧
離れて、岸のかたへ高く飛びゆく螢あり。あはれ、こは少女が魂のぬけ出でたるにはあらず ⑨
や。 ⑩

①【杭に】杙に［塵・縮］。③【漕ぎかへしぬ】漕ぎかへしつ［改・縮］漕ぎ返しつ［塵］。【奈にして】奈にして［美・改］奈何にもして［塵］奈にもして［縮］。【おもふのみにて】思ふのみにて［塵・縮］。④＊［縮］では「レオニイの」の前で改行されている。［美・改］では「遑あらざりしなり。」が行末で終っているため改行の有無は不詳。【レオニイ】レオニ［塵］レオニイ［縮］。

〈50〉しばしありて、今まで木影に隠れたる苫屋の燈見えたり。近寄りて、「ハンスルが家はこゝ ①
なりや。」とおとなへば、傾きし簷端の小窓開きて、白髪の老女、舟をさしのぞきぬ。「こ ②
としも水の神の贄求めたるよ。主人はベルヒの城へきのふより驅りとられて、まだ歸らず。 ③
手當して見むとおもひ玉はゞ、こなたへ。」と落付きたる聲にていひて、窓の戸さゝむとし ④
たりしに、巨勢は聲ふりたてゝ、「水に墜ちたるはマリイなり、そなたのマリイなり。」と ⑤
いふ。老女は聞きも畢らず、窓の戸を明けはなちたるまゝにて、棧橋の畔に馳出で、泣く ⑥
〳〵巨勢を扶けて、少女を抱きいれぬ。 ⑦

①【こゝなりや。】こゝなりや、［美・改・塵・縮］。②【のぞきぬ】のぞきつ［美・改・塵・縮］。③【求めたるよ】求めつるよ［塵］。④【おもひ玉はゞ】おもひ玉はば［美・改・塵］。⑤【そなたのマリイなり。】そなたのマリイなり、［美・改・塵・縮］。⑥【明けはなちたる】明け放ちたる［美・改・縮］開け放ちたる［塵］。

〈51〉入りて見れば、半ば板敷にしたるひと間のみ。今火を點したりと見ゆる小「ランプ」竈の上に微なり。四方の壁にゑがきたる、粗末なる耶蘇一代記の彩色畫は、煤に包まれておぼろげなり。藁火焚きなどして介抱したれど、少女は蘇らず。巨勢は老女と屍の傍に夜をとほして、消えて迹なきうたかたのうたてき世を喞ちあかしぬ。

①【ゑがきたる、粗末なる】ゑがきたる粗末なる［美・改・塵・縮］。②【おぼろげ】おぼろけ［改］。③【介抱したれど】介抱しぬれど［塵］。④【あかしぬ】あかしつ［改・塵・縮］。

〈52〉時は耶蘇曆千八百八十六年六月十三日の夕の七時、バワリヤ王ルウド井ヒ第二世は、湖水に溺れて殂せられしに、年老いたる侍醫グッデン、これを救はむとて、共に命を殞し、顏に王の爪痕を留めて死したりといふ、おそろしき知らせに、翌十四日ミュンヘン府の騷動はおほかたならず。街の角々には黑緣取りたる張紙に、此訃音を書きたるありて、その下には人の山をなしたり。新聞號外には、王の屍見出だしたるをりの摸樣に、さま〴〵の臆說附けて賣るを、人々爭ひて買ふ。點呼に應ずる兵士の正服つけて、黑き毛植ゑしバワリヤ鍪戴きたる、警察吏の馬に騎り、または徒立にて馳せちがひたるなど、雜沓いはんかたなし。久しく民に面を見せたまはざりし國王なれど、流石にいたましがりて、憂を含みたる顏も街に見ゆ。美術學校にも此騷ぎにまぎれて、新に入りし巨勢がゆくへ知れぬを、心に掛くるものもなかりしが、エキステル一人は友の上を氣づかひ居たり。

①【六月】八月［美・改・塵・縮］。＊［底］が正しく、［美・改・塵・　縮］は誤植。【十三日の夕の】十三日夕の［縮］。【バワリヤ王ルウド井

ヒ】バワリア王ルウド井ヒ［塵］バワリア王ルウド井ヒ［縮］。②【グツデン、これを】グツデンこれを［美・改・塵］グツデンこれを［縮］。＊［底］の傍線は一文字分短い。③【ミュンヘン府】ミュンヘン府［美・改・塵］。ミュンヘン府［縮］。⑤【見出だしたる】見出だしつる［塵］見出したる［縮］。【摸様】模様［美・改］。⑥【兵士】兵卒［塵］。【植ゑし】植ゑたる［塵］。【バワリヤ】バワリア［塵］バワリア［縮］。【戴きたる】戴ける［塵］。⑦【または】また［縮］。⑨【入りし】入し［美・改・塵・縮］。【心に掛くるものも】心に掛くるもの［塵・縮］。⑩【エキステル】エクステル［縮］。

〈53〉六月十五日の朝、王の柩のベルヒ城より、眞夜中に府に遷されしを迎へて歸りし、美術學校の生徒が「カツフエエ、ミ子ルワ」に引上げしとき、エキステルはもしやと思ひて、巨勢が「アテリエ」に入りて見しに、彼はこの三日が程に相貌變りて、著しく痩せたる如く、「ロオレライ」の圖の下に跪きてぞ居たりける。

①【レオニに近き】レオニ近き［美・改］。【溺れしと】溺れぬと［美・改・塵・縮］。②【止みぬ】已みぬ［塵］。③【カツフエエ、ミ子ルワ】「カツフエヽ、ミ子ルワ」［美・改］「カツフエエ、ミネルワ」［塵・縮］。【引上げしとき】引上げし時［美・改・塵・縮］。【エキステル】エクステル［縮］。③【「アテリエ」】「アトリエ」［改・塵・縮］。【著しく】著るく［改・塵・縮］。④【圖】畫架［縮］。

〈54〉國王の横死の噂に掩はれて、レオニに近き漁師ハンスルが娘一人、おなじ時に溺れしといふと、問ふ人もなくて止みぬ。

①【レオニに近き】レオニ近き［美・改］。【溺れしと】溺れぬと［美・改・塵・縮］。②【止みぬ】已みぬ［塵］。